

日本のアニメ監督は  
いかにして世界へ  
打って出たのか？

数土直志

宮崎駿 高畑勲

今敏 湯浅政明

細田守 新海誠

富野由悠季

大友克洋

押井守

今こそ知るべき

荒牧伸志

アニメ報道の最前線を

駆け続けるジャーナリストが、  
日本のアニメ監督たちの世界  
進出の軌跡から解き明かす！

日本アニメの  
現在地!!



日本のアニメ監督はいかにして世界へ打って出たのか？

数土直志

星海社

241



SEIKAISHA  
SHINSHO



## はじめに

日本生まれのアニメが、変わらず世界中で大人気だ。それどころか海外での人気は、ここ10年でますます大きくなっている。アニメ製作会社の団体である（一社）日本動画協会の調査レポート「アニメ産業レポート2021」によれば、2011年には2669億円だった海外の日本アニメの関連市場規模は、2020年には1兆2394億円にも達した。

わずか10年間で4倍だ！

実際に世界中のおもちゃ屋の棚には、ポケモンやドラゴンボール、ガンダムといった日本生まれのキャラクター玩具が所狭しと並んでいる。日本で大ヒットした『劇場版「鬼滅の刃」無限列車編』や『劇場版 呪術廻戦0』の映画は世界中の映画館で上映され、週末興行ランキングの上位に名前を連ねる。そんな姿はいまや自然だ。

最近の人気拡大の理由に、2010年代に世界的に普及した動画配信サービスの役割を指

摘する声もある。インターネットを通じて、いつでも、どこでも手軽に日本アニメが視聴できるようになった結果、日本アニメの楽しさに気づいたファンの数が増えたという。

それでも日本アニメの人気は、いまになって突然に現れたわけではない。いまから50年以上も昔、1960年代にはすでに日本アニメは海外に積極的に輸出されていた。

米国では『アストロボーイ』と名付けられたテレビシリーズ『鉄腕アトム』や『バトル・オブ・ザ・プラネット』と名前を変えた『科学忍者隊ガッチャマン』は、当時から人気だった。フランスでは『聖闘士星矢』、南米や中東の『キャプテン翼』、中国の『一休さん』、インドの『忍者ハットリくん』など、各国でいち時代を築いた日本アニメは少なくない。

しかし60年代から80年代頃まで、日本アニメは海外で日本製であることをほとんど明示することなく放送されていた。熱心なファンだけがそれが遠い異国の地・日本で、日本のスタッフが作っていたことに気づいた。

状況が変わったのは80年代の終わりから90年代にかけて。バブル経済崩壊後、経済面で日本存在感が薄れるのに反比例するかのようになり、日本のポップカルチャーは国外で存在感を増していく。その筆頭にアニメがあった。世界は突然、極東の島国からこれまで見たことの

ないような表現のアニメーションが大量に生み出されていることに気づく。

どこで作られたか分からなかった無名の量産作品が、これまでとは逆に「日本」ブランドを強調することで視聴者に届けられていく。さらに人々の関心は「一体誰が、どうやってこれらの作品を作っているのか」に向った。

そこに数え切れないアニメ監督やアニメーター、美術、脚本といった様々な制作スタッフがいた。いくつもの個性溢れるアニメ制作スタジオがあることに彼らが気づいた時、日本アニメは使い捨ての量産品ではなく、新たな視点での作品評価が生まれた。

それはさらに宮崎駿みやざき はやおやスタジオジブリのような世界を代表する巨匠やスタジオブランドの登場にもつながっていく。そうした軌跡を追うことは、いまや日本を代表するカルチャーとなったアニメがいかに世界で受け入れられるようになったかを知る手がかりにもなるはずだ。

本書では、数あるアニメスタッフのなかでも制作のクリエイティブを統括する監督にスポットを当てている。世界で名前を知られる日本のアニメ監督たちが、「どのような過程で認知されるようになったのか」、「それが世界と日本に何をもたらしたのか」を辿り、解き明かすことで、世界における日本アニメの位置の変化を明らかにしたい。

実際、日本のアニメの魅力がどのように発見され、広がっていったのか、作品評価がどう

築かれたかはこれまで十分に明らかにされていない。日本のアニメはいつからテレビ放送を穴埋めする番組からポップカルチャーの先端を走るようになったのだろうか？ それは、世界でもっとも知られるアニメ監督たちがいつ世界の巨匠になったのかと結びついているはずだ。

ここではまず宮崎駿や高畑勲たかはたいさおといったスタジオジブリを支えた監督たちを取り上げる。宮崎駿は2002年に『千と千尋の神隠し』でベルリン国際映画祭にて金熊賞（グランプリ）を受賞、翌年のアカデミー賞最優秀長編アニメーション賞を獲得して世界で一躍脚光を浴び、映画の巨匠の地位まで登り詰めた。

同じくスタジオジブリでアニメ映画を多く撮った高畑勲には、そうしたドラマティックなストーリーはない。それでも専門家における評価は宮崎駿に勝るとも劣らない。それはなぜなのか。

一般には馴染みが薄いかもしいないが、海外でとりわけ評価の高い今敏こん さとし、湯浅政明あさまさあきも重要な監督だ。今敏のキャリアにおいて、劇場長編の初監督作『パーフェクトブルー』のカナダ・ファンタジア国際映画祭上映が果たした役割は、日本のアニメ史を語るにおいて欠かせないエピソードだろう。アヌシー国際アニメーション映画祭の度重なる参加が人気の軸となった湯浅政明は、「映画祭に愛された」ことでグローバルの映画界に名を馳せた。

映画祭を知名度アップの場として、意識的に活用する細田守の近年の動きも見逃せない。作品をいかに世界に届けて評価の組上そじょうにのせるかは、アニメに限らず日本のクリエイターが不得意とするところだからだ。

『君の名は。』の大ヒットで知られる新海誠しんかいまことは、若者の圧倒的な人気を基盤とする。その人気と評価は映画祭といったシステムよりもフアンの熱狂に押し出されたことが大きい。原動力となったのは、ファンイベントとインターネットだ。

海外の映画祭やアワードで喝采を浴び、たびたびメディアを賑わす監督がいる一方で、日本では深くリスpektされながら、そうした舞台にあまり姿を見ない監督もいる。豊かな才能にもかかわらず、海外であまり名前を知られていない。その違いはどこで生まれるのだろう。ここでは「機動戦士ガンダム」シリーズの富野由悠季とみのよしゆき、さらに「エヴァンゲリオン」シリーズの庵野秀明あんのひであきをとりあげることですそれを探る。

これとは逆に日本よりも海外でより知られ、海外での仕事が豊富な監督もいる。その活躍は、逆に日本で十分に知られていない。いくつもの海外共同プロジェクトに参加する荒牧伸志あらかまきしんじ、1980年代、90年代にOVAと呼ばれたビデオ作品や映画で活躍して『獣兵衛忍風帖』や『パンパイアハンターD』といった傑作を生み出した川尻善昭かわじりよしあきはそうした立場を代表する。

さらに日本アニメが認知された初期の動きと最新動向にもふれたい。『日本のアニメ』のブランドが海外で認知されるきっかけのひとつが80年代末の大友克洋監督『AKIRA』であることは多くの人が認めるところだ。さらに『AKIRA』の流れを引き継いだのが押井守が監督した『GHOST IN THE SHELL / 攻殻機動隊』である。

こうしたなかで生まれ、大きくなった日本アニメと世界の関わりは現在進行形でいまにながっている。いまこの瞬間にも、世界中で誰かが新しいアニメに出会っているはずだ。

そして現在のアニメファンが出会うのは、若い世代の作るアニメが多いはずだ。次世代の活躍が期待されるアニメ監督を取り上げ、彼らが世界とどう向き合っているのかも考えてみたい。それは日本のアニメ業界がこの先どう世界とつながっていくかとも連動するはずである。

京都アニメーション出身で『聲の形』、『けいおん!』などで知られる山田尚子、大学時代の短編自主制作『フミコの告白』で一躍注目された石田祐康、『HELLO WORLD』が中国で大ヒットとなった伊藤智彦らがそうした監督である。さらに最も新しい記録破りの2つの映画の監督に注目する。『鬼滅の刃』の監督・外崎春雄、『呪術廻戦』の監督・朴性厚だ。日本アニメは、いまもとてつもない才能で溢れている。その未来は明るい。

いまここで名前をあげた監督たちの軌跡を追っていくと、高い知名度や人気といった共通項と裏腹にそこに至る道がかなり異なっていることも分かる。有名監督といっても関わってきた時代も道筋も、海外での受け取られかたもそれぞれ違うからだ。監督や作品の個性そのものが様々で、だからこそ世界に認められていく過程もまた違ってくる。

最後に本書が監督を中心として他の職種のスタッフへの言及が少ないことについて説明したい。アニメは監督だけが作るものでなく、アニメーターや美術、脚本、音楽、音響、撮影……、さらに多くの職種の仕事との共同作業で成立している。しかしアニメ制作の職種はあまりにも広がりがあり、ここでは作品の顔となる監督にフォーカスすることで日本アニメと海外のつながりを明らかにしたい。

またここで紹介する監督は、数多くのアニメが制作されている日本のなかではごく一部であることも留意いただきたい。当然、取りあげられるべき監督が抜けているとの指摘は多々あるはずだ。今回はなるべくそのキャリアの歩みかたや個性の違うことを考えてフォーカスしている。ここで言及できなかった優れた監督がまだ大勢いることを知っておいて欲しい。全てを紹介しきれないのは、僕の力不足のためと理解いただきたい。

目次

はじめに 3

第1章 宮崎駿はいかに世界の巨匠になったか 13

コラム1 世界4大映画祭とは？ 37

第2章 高畑勲、監督から学術、教育まで「知の巨人」 41

第3章 なぜ今 敏は海外で人気なのか 57

第4章 湯浅政明 クリエイターを熱狂させるクリエイター 79

コラム2 アヌシー国際アニメーション映画祭とは？ 102

第5章 細田守はグローバルスタンダードを目指す 107

コラム3 アカデミー賞と日本のアニメーション 136

第6章 新海誠はオンリーワンで輝く 139

コラム4 世界で一番稼いだ日本アニメは「宮崎駿」か「新海誠」か 161

第7章 無冠の巨匠・富野由悠季 165

第8章 80年代、90年代に大友克洋、押井守が切り拓いた道 195

第9章 世界のアニメ史を彩ったOVA

『銃夢』、『獣兵衛忍風帖』、『うろつき童子』 217

第10章 荒牧伸志、海外プロジェクトで好かれる大物監督 241

第11章 新世代の監督は何を引き継ぎ、どう変わっていくのか

山田尚子、伊藤智彦、石田祐康、外崎春雄、朴性厚ら 261

コラム5 ロッテントマトとIMDb 批評サイトの役割 289

終章 変わる世界 2022年以降の日本アニメを取り巻く状況 293

おわりに 310

第  
1  
章

宮崎駿はいかに世界の巨匠になったか

## アニメーションを越えた映画界の巨匠

高級ブランドショップが立ち並び、ハリウッドのセレブや富豪の行きかう街、米国カリフォルニア州ロサンゼルス郡ビバリーヒルズ地区。アメリカンドリームの象徴ともいえるその真ん中に、2021年9月、アカデミー映画博物館がオープンした。映画界の頂点を決めるアカデミー賞の主催で有名な米国・映画芸術科学アカデミーによる博物館は約2万8000㎡の施設に23万7000本のフィルム、1250万点の写真、それに衣装やデザインなど映画史の記念碑を収める。今世紀初頭には名門百貨店メイシーズとして活躍した築82年の建物をリノベーションし、さらに球形の不思議な展望台が設けられた建物は世界的な建築家レンゾ・ピアノが設計、6年の歳月と500億円以上もの建設費用をかけて完成した。

ギャラリーや施設の多くに「スピルバーグ・ファミリー・ギャラリー」や「デヴィッド・ゲフィンシアター」と個人名や企業名が入ることから分かるように、建設費のほとんどは米国の映画・エンタテインメント界の企業・個人を中心とした寄付である。アカデミー映画博物館は、米国が米国の映画芸術を讃える殿堂なのだ。

このオープニング柿落としの目玉企画に「宮崎駿回顧展」が組まれた。『となりのトトロ』や『千と千尋の神隠し』、『魔女の宅急便』といった宮崎駿のアニメ映画の資料300点以上

を並べた。宮崎駿の名前を冠した展覧会では国内外ともかつてなかった規模、と言っているだろう。米国の映画業界を祝祭する重要なシーンでの日本アニメの巨匠起用は、「宮崎駿」が映画業界、そして現代カルチャーを代表する世界的な存在であることを改めて思い起こさせる。同時に映画芸術科学アカデミーが宮崎駿の持つ「大衆性」に、オープニングに相応しい動員を期待する思惑も垣間見える。これこそが日本を代表するアニメ監督を語る時に、まず宮崎駿から始めなければいけない理由だ。いま世界で最も知られる日本のアニメ監督、映画監督が宮崎駿だからである。

宮崎駿の経歴は華やかだ。2002年にベルリン国際映画祭で『千と千尋の神隠し』がアニメーション映画として初めてグランプリにあたる金熊賞を受賞。翌03年には米国アカデミー賞最優秀長編アニメーション賞に輝く。以後も『ハウルの動く城』、『崖の上のポニョ』など、新作をリリースするたびに大ヒット、国内外の映画界を賑わせてきた。

2013年の『風立ちぬ』が現在まで公開されているなかでは最新作。航空技術者の堀越二郎をモデルに大戦前の日本を舞台に大人の恋を描いた。それまでの宮崎駿作品と異なり、大人向けを意識した内容は賛否両論となったが、国内興行収入120億円とその年の邦画で最大のヒットになった。70歳を超えてなおかつ変わり続ける才能は多くの人を驚かせた。

しかしこの時期のもっと大きなサプライズは、本作公開直後に電撃発表された宮崎駿の長編アニメ制作からの引退宣言である。今後、宮崎駿の新作長編映画がないというファンの驚き、それは業界内での衝撃も大きかった。宮崎作品は公開された年の映画興行収入全体の金額を左右するほど、大きな影響力を持っていたからだ。

引退宣言は4年後の2017年には撤回されたが、2013年の引退宣言はスタジオジブリの制作部門の解体につながり、スタジオのかたちも大きく変わった。アニメ制作の現場が厳しいとされる日本で、スタジオジブリの社員雇用や望まれた制作環境はひとつの理想とされていたが、それが失われたのだ。

引退宣言撤回後は、吉野源三郎の『君たちはどう生きるか』を原作に長編アニメの制作に再び挑んでいる。いまから85年も前に発表された小説だ。15歳の少年コペルにその叔父が人生とは何かについて語りかけるかたちで構成する。2017年に漫画化されベストセラーになったが、前作の『風立ちぬ』に続き大衆に届けるアニメ大作の題材としては異色だろう。2022年の時点で宮崎駿監督の新作公開はすでに『風立ちぬ』公開から9年も途切れている。制作スタッフの人数もこれまでより絞り、一段と長い時間をかけるなど巨匠の新たな挑戦が際立つ。

その間、宮崎駿とスタジオジブリを取り巻く環境は、ますます大きくなっている。201

4年には米国・映画芸術科学アカデミーのアカデミー賞名誉賞を受賞し、先のアカデミー映画博物館のオープニング企画展も開催された。2022年11月には愛知県の愛・地球博記念公園にスタジオジブリをテーマにした巨大な「ジブリパーク」もオープンする。『となりのトトロ』や『魔女の宅急便』といった宮崎駿監督作品の数々が、様々なかたちでパーク内に登場する。

映画を離れても宮崎駿への関心は衰える気配がない。むしろ「宮崎駿」は、もはや生きた伝説なのかもしれない。アニメ監督であるだけでなく、映画業界、さらにはひとりの作家として、現代カルチャーを代表するアイコンなのだ。

### 1960年代、キャリアのスタートはアニメーター

宮崎駿は、なぜ世界でもこれほどまで有名なアニメ監督になったのだろう。いまでこそ誰でも知る巨匠だが、もちろんキャリアのスタートから世界や日本でも広く知られていたわけではない。そもそも制作会社入社時の役職はアニメーターで、当初は演出・監督を目指していなかった。他にも多くいたアニメの絵を描くのが好きなアニメーターのひとりだった。

宮崎駿が世界で名前を知られるようになるまでを、初期のキャリアから辿ってみたい。宮崎駿は1941年東京生まれ、学生時代からアニメ、マンガに高い関心を持っていた。長編

アニメ映画『白蛇伝』に感銘を受けて、学習院大学卒業後にアニメーターとして本作を制作した東映動画（現・東映アニメーション）に入社した。以後60年近くにわたりアニメーション制作に携わる。

東映動画入社直後から才覚を示し、後にスタジオジブリを共に設立することになる先輩で盟友とされる高畑勲と共に長編映画『太陽の王子ホルスの大冒険』にも参加している。アイヌ伝承も取り入れた冒険活劇は日本アニメ史上に輝く傑作である。

この時代に高畑と出会ったことが、その後のキャリアを大きく変える。当時、東映動画は制作の中心を長編劇場映画からTVシリーズへと大きく舵を切っていた。これに納得のいかない高畑勲は1971年に東映動画を退社、高畑に誘われた宮崎駿も小田部羊一こたべ しょういちと共に同社を離れることにしたためだ。その後、2018年に高畑勲が亡くなるまで、2人の盟友関係が続くことになる。

新たな創作を求めて東映動画を辞めた宮崎駿だが、その制作環境は安定しなかった。移籍直後に所属したAプロでは『長くつ下のピッピ』の企画を進めたが、結局これは実現しなかった。そこで当時日本中で人気となっていたパンダを登場キャラクターとした『パンダコパンダ』に参加し、原案や脚本も手がける。その後の『アルプスの少女ハイジ』はズイヨー、『未来少年コナン』は日本アニメーション、また『ルパン三世 カリオストロの城』は東京ム

ービー新社、さらにその後の『風の谷のナウシカ』ではトップクラフトと制作現場を渡り歩  
くかたちだった。

監督としての本格的な取り組みは、1978年の『未来少年コナン』が最初になる。米国のアレグザンダー・ケイのSF冒険小説『残された人びと』を原作にしたテレビシリーズである。『赤毛のアン』などでレイアウト設計などを手がけて作品全体を見る立場にあったこと、また高畑勲からの信頼が厚かったことが理由だ。自身をアニメーターと考える宮崎駿が自から手を挙げたものではなかったはずだ。

それでも『未来少年コナン』には、その後の宮崎駿監督作品の特徴がすでにいくつも現れている。原作から離れたオリジナルなストーリーが展開するのもそのひとつ。そこには絵の上手さだけでなく、ストーリーテラーとしての才覚が発揮されていた。「テーマ性」と「エンタテイメント」の両立も宮崎駿ならだ。視聴率は必ずしも高くなかったが、NHKが本格的に取り組んだ初の30分枠アニメ、ゴールデンタイムの放送ということもあり、繰り返し再放送されたことで、時代と世代を代表するアニメになっていく。

### 興行苦戦、劇場監督デビュー『カリオストロの城』とその後の評価

『未来少年コナン』の経験が、1979年の『ルパン三世カリオストロの城』での監督起用

につながる。長編映画監督として演出のキャリアを広げた。ただ『カリオストロの城』の制作期間はシナリオ完成からおよそ半年と極めて短く、ハードな制作体制を強いられた。こうした環境を覆そうとするエネルギーが、逆に熱量の高い作品を生み出した。本作はアニメ関係者やアニメファンに高評価だったが、配給収入がシリーズ前作の『ルパン三世 ルパンVS複製人間』の約10億円に対して3億500万円程度と厳しい結果となった。『カリオストロの城』は後にテレビ放送が繰り返されることで、多くの人に知られ大きな人気を獲得する。劇場ではいまでも何度もリバイバル上映される。しかし当時の世の中での受け入れられかたは、現在の名作との高い評価とだいぶ違った。

『ルパン三世 カリオストロの城』の時代までは、海外はもとより国内でも監督としての宮崎駿は知る人ぞ知る存在であった。その評価は業界内や一部のファンに留まっていたはずだ。宮崎駿の名前が知られ、作家性が注目されるのは『風の谷のナウシカ』以降だ。

しかし『ナウシカ』の映画制作も順調だったわけではない。80年代は漫画原作がなく、当てるかわからないオリジナルの劇場アニメ企画を通すのはハードルが高かったからだ。そこで当時アニメ雑誌「アニメージュ」(徳間書店)の編集者で後にスタジオジブリとともに立ち上げる鈴木敏夫は、そうであれば原作から作ればいいと「アニメージュ」での漫画連載を強く勧

めたのだった。それが『風の谷のナウシカ』で、宮崎駿にとつての初の長編漫画である。

1984年に劇場公開した『風の谷のナウシカ』は、こうしてまずアニメ雑誌の連載漫画から始まった。既存の原作はなく、世界観、物語は全て宮崎駿の頭の中から生まれている。舞台は遙か未来の地球、「火の七日間」と呼ばれる最終戦争により地球は荒廃した大陸と腐海と呼ばれる瘴気を発する菌類の森に覆い尽くされる。高度な文明を失った人類はそうした環境で暮らし、もはや滅亡を待つばかり。その中でも争いを繰り返す人々の前に現れた少女・ナウシカが世界を変えていく。壮大なストーリーだ。

映画は公開後、ヒット作となり好評を博した。オリジナル作品、原作も手がけたことで、クリエイターとしての宮崎駿の名前も知られるようになる。まさに鈴木敏夫の狙いどおりである。漫画連載は映画公開後も続き、完結は連載スタートから12年後の1994年。2021年までに世界各国で翻訳出版され、累計発行部数は1200万部を超えている。映画とは異なる結末、複雑なテーマが盛り込まれた漫画は、映画だけでない宮崎駿の表現者としての才能を示す。映画とは違う結末、主人公・ナウシカの印象も大きく異なる本作は、漫画分野での宮崎駿の表現の頂点となった。宮崎駿は2014年に米国コミック業界によるアイズナー賞「コミックの殿堂」に選ばれている。

## 天才的なプロデューズ・プロモーション 鈴木敏夫との出会い

宮崎駿のキャリアにとって、鈴木敏夫の存在は欠かせない。その出会いは高畑勲の出会いと同じぐらい重要だろう。宮崎駿の生み出したクリエイティブを鈴木があの手この手で世界に広げていく。それは自転車の両輪で、どちらがなくなるとも回らない。

鈴木敏夫と宮崎駿、高畑勲の会いはエッセイやトークでしばしば語られている。最初のきっかけは、鈴木敏夫が1978年に「アニメージュ」創刊号の編集を突然全部任されたことにある。『太陽の王子 ホルスの大冒険』という傑作があると聞きつけた鈴木は、それを誌面に取り上げようと監督（演出）だった高畑勲に会って欲しいと電話したのだ。これに対して高畑はなぜ会えないかの理由を一時間にわたり説明した後、隣にいた宮崎駿に電話を回したのだ。しかしこちらは逆に取材は構わないが16ページは必要だと無理難題。結局、編集の修羅場の時期でもあり、3人はこの時は会うことがなかった。

宮崎駿が鈴木敏夫と実際に会ったのは、1979年の『ルパン三世 カリオストロの城』の制作の時だ。この時も「アニメージュ」の取材だが、今度は宮崎駿は「取材を受けたくない」と言う。鈴木敏夫は一週間スタジオに通い詰めて、ずっと隣に座り続けた。そして一週間後、宮崎ははじめて鈴木に絵コンテを見せ、その後、宮崎駿と鈴木敏夫の信頼関係は、40年以上

続くことになる。

宮崎駿と鈴木敏夫の関係は、はたから見るととても不思議だ。宮崎はこうしたエピソードからも窺える気難しさが感じられるし、数々の発言からかなりの理想主義にも見える。一方の鈴木敏夫は「アニメージュ」の編集者の前は、大衆誌「アサヒ芸能」にいたこともある。社会の表も裏も知り尽くしたとのイメージだ。そもそも映画のプロデューサーはお金を集め、人を説得して動かすが、正攻法だけでなく時には策略も巡らすはずだ。

宮崎の鈴木に対する信頼はどこから生まれるのか。かつて宮崎駿は理想主義について、「理想を失わない現実主義者にならないといけないんです。理想のない現実主義者ならいくらでもいるんです」と語った。宮崎駿は現実主義の部分を、鈴木敏夫に預けることで、自らの理想を貫く道を選択しているのではないだろうか。資金調達や制作費の回収、スタジオの雑事から離れることで、自らの理想にまい進する。それが宮崎駿の現実主義で、ちよつと拡張して表現するなら「聖なる宮崎駿」「俗としての鈴木敏夫」と一対になる。対照的なふたりだからこそ、信頼関係もまた生まれたのではないか。

「宮崎駿」「高畑勲」を発見し、日本のみならず世界に通ずると信じて次々に話題を作りだす。鈴木敏夫はプロデューサー、プロモーションの天才だ。この3人の関係性が築かれたこと

で、世界の宮崎駿、スタジオジブリは初めて可能になったのである。

### 個性を消された風の谷のナウシカ

『風の谷のナウシカ』の話に戻ると、本作は80年代の当時すでに海外向けに番組販売されていた。しかしその扱いはいまの宮崎駿の立場からは想像もつかないものだった。米国で映画配給権を購入したニュー・ワールド・ピクチャーズは新興映画会社で、主な仕事は低予算映画やB級映画の配給であった。配給権が低価格で購入できる海外映画にも積極的だったのである。それでも日本アニメがグローバルでは決してメジャーではなかった1980年代に、日本国内向けに日本で制作されたアニメ映画が海外で配給・上映されること自体が稀であった。その点では『風の谷のナウシカ』の配給自体は幸運で、注目された作品ではあったかもしれない。

しかしニュー・ワールドの作品の扱いは褒められたものではなかった。『風の谷のナウシカ』は、数ある低価格の海外映画の一作との位置づけで購入されたのだ。ニュー・ワールドが求めたのは、大衆受けするSFファンタジーアクションである。配給権だけを安く購入できる海外映画は自社製作よりも利益がやすいとの思惑もあったはずだ。さらにアニメーション、しかもSFファンタジーであれば実写映画ほど文化の違いを感じさせず、観客に受け

入れられるとも考えたのだろう。この時点で日本での『未来少年コナン』や『ルパン三世カリオストロの城』といった宮崎駿の評価は欧米では一般的でなかったし、作品もほとんど鑑賞されていなかった。『宮崎駿』の名前が『風の谷のナウシカ』を購入する際に意識されることはなかった。

劇場公開にあたっては、さらに大衆受けするファンタジーアクションに合わせるための大幅な変更がなされた。タイトルは『Warriors of the Wind (風の戦士たち)』に変わり、ポスタービジュアルもアクションバトルが強調される。不要とされたドラマはカットされ、上映時間は116分から95分に大幅に短縮された。

ニュー・ワールドの変更は後年、多くの研究者やファンから批判されるが、当時は日本アニメを現地向けに改変するのは一般的であった。むしろ改変が容易なことが、日本アニメの魅力のひとつの見方もあった。日本製であるという国籍も必要なく、スタッフどころか日本アニメが日本産であることをアピールすることも出来ない時代である。幸運にも映画鑑賞に辿りついた観客の多くは、『Warriors of the Wind (風の戦士たち)』が日本で制作されたということを知ることもなく鑑賞を終えたに違いない。後にこうした上映形態を知った宮崎駿は激怒したとも伝えられる。2000年代以降、スタジオジブリが海外版の制作の際に多くの注目をだすようになった理由のひとつかもしれない。

オリジナルのかたちでの『風の谷ナウシカ』の北米リリースは、ウォルト・ディズニーが北米配給権を獲得する2005年まで待つことになる。しかし20年以上前の旧作でもあり、その時も大きなプロモーションはなかった。宮崎駿作品では『ルパン三世 カリオストロの城』と共に『風の谷のナウシカ』が海外で知名度が低い理由だ。

『風の谷のナウシカ』がようやく広く知られるようになったのは、新たな配給会社GKIDSが2017年にオリジナル版『風の谷のナウシカ』を北米でリバイバル公開した後だろう。GKIDSは世界の良質な映画に特化した中堅配給会社で、作品選びの確かな目とマーケティング、プロモーションのうまさ定評がある。2012年にスタジオジブリ全作品の配給権を獲得、また2021年には『ルパン三世 カリオストロの城』も劇場公開した。2000年代以降のヒット作だけでなく宮崎駿の初期作品発掘に意欲的だ。現在は宮崎駿監督作品の北米展開はなくなってはならない存在になっている。

30年かかろうやく本来の作品の評判を取り返した『風の谷のナウシカ』は、海外での日本アニメの評価、そして宮崎駿の評価の変化を示したものでないだろうか。作品の国籍やスタッフの名前さえ気にされない時代から、むしろ「日本のスタジオジブリ」、「宮崎駿の監督作品」、それが売りになる時代への変化である。

## スタジオジブリ設立、変わる制作環境

80年代、まだ世界に知られてなかった宮崎駿だが、それでも海外との接点は意外に早い時期からあった。宮崎駿の初の海外渡航は、1971年のスウェーデンである。当時Aプロで企画が進んでいた『長くつ下のピッピ』のアニメ化の許諾を取るためにプロデューサーの藤岡豊と現地に向いた。結局『ピッピ』のアニメ化許諾は下りず、企画は頓挫する。宮崎駿も、当時は名前も知られていないスタッフの1人だったのだ。ただしこの渡欧は宮崎駿の創作には大きな刺激となったようだ。当時の体験を宮崎は「こういうのをカルチャーショックというのか、というぐらい面白かったですね」と語っている。『幻の「長くつ下のピッピ」』（岩波書店）

1980年頃から企画・制作が始まっていた日米合作の大作映画『NEMO／ニモ』でも、宮崎は海外に関わりがあった。原作は米国コミックの開拓者ウィンザー・マッケイの伝説的な傑作『リトル・ニモ』である。当時アニメーションでの海外展開を考えていた東京ムービーのプロデューサー藤岡豊は、これをテレコム・アニメーションフィルムによる海外合作の長編映画にすることで世界進出を目指した。当時勢いのあった消費者金融のレイクがスポンサーになり、破格の55億円もの製作資金を投じた。制作にあたり日本、アメリカ、ヨーロッパから煌めく才能がロサンゼルスに集められたが、そのなかに宮崎駿、高畑勲、大塚康生（おおくかやすお）ら

の姿もあった。

しかし共同製作の枠組みの難しさから多くのクリエイターが途中離脱、宮崎駿、高畑勲も本作に参加することはなかった。それでも当時の海外関係者とのやりとりは、宮崎駿にグローバルでのアニメーション制作がどんなものであるかの印象を残したはずだ。後に宮崎と長い友人関係が続けるジョン・ラセターと初めて出会ったのもこの頃だ。ラセターは『トイ・ストーリー』をはじめピクサーとディズニー両スタジオで数々の世界的ヒット作を生みだすが、宮崎駿からの影響をたびたび語っている。

『NEMO／ニモ』は長い時間をかけて1989年に完成、日米で公開したが興行は厳しく、興行収入は製作費を大きく下回った。日本と海外の共同制作ビジネスの困難さを示す例となる。

しかし80年代は日本のアニメが共同製作で積極的に海外を目指した時期でもあった。数々のプロジェクトが進み、東京ムービーはこの頃フランスとの合作で『ユリシーズ31』という大作のテレビシリーズを作っている。当時の宮崎駿は他にも米国のリチャード・コーベンのコミック『ロルフ（ROWLF）』のアニメ化企画にも携わったが、結局これも実現しなかった。一部エピソードを監督したイタリアの国营放送局RAIとの合作で、日本では1984年に放送された『名探偵ホームズ』だけが宮崎駿の数少ない海外共同制作作品になる。

『風の谷のナウシカ』の制作後、宮崎駿のキャリアは大きな転換を迎える。1985年のスタジオジブリの設立だ。『風の谷のナウシカ』を制作したトップクラフトを発展的に解散、これを母体に高畑勲と宮崎駿のクリエイティブを実現するスタジオを屈指した。

ここで大きな役割を果たしたのが、『風の谷のナウシカ』でも活躍した鈴木敏夫である。スタジオジブリの設立には、鈴木敏夫の出身会社である徳間書店が出資した。そして鈴木敏夫の役割が本格的にプロデューサーに変わっていったのもこの時期である。

制作スタジオはトップクラフトを母体に引き継いだ。1972年に東映動画出身の原徹はらとほるが設立したトップクラフトは、もともと北米のスタジオから制作受注を受ける海外合作に特化していた。しかしトップクラフトの流れを汲むものの、むしろ当初スタジオジブリは海外をあまり意識も、重視した形跡もない。ここでは海外受注のスタジオから国内長編映画のための転換が目指されていた。スタジオジブリの海外評価とは裏腹に、2000年代初頭でさえスタジオが積極的に海外に向けてアクションすることは少なかったのである。

### ベルリン国際映画祭で一躍名を上げる

『魔女の宅急便』、『もののけ姫』の大ヒットもあり、90年代には国内での宮崎駿の知名度と

人気は一般層にまで到達する。一般メディアでも作品の批評や分析が載るなど、評価はすでに固まりつつあった。

しかし世界における宮崎駿のキャリアの転換は、ベルリン国際映画祭だろう。『千と千尋の神隠し』が日本映画として39年ぶりに金熊賞に輝いたのだ。アニメーション映画の受賞は初だ。世界には権威が高いとされる国際映画祭がいくつかあり、ベルリンの他にフランスのカンヌ、イタリヤのヴェネチア、カナダのトロントなどが知られている。しかしその中でもベルリンとカンヌは飛びぬけた存在である。このふたつの映画祭のコンペティションで賞を獲ることは多くの映画人の夢でもある。金熊賞はその中でグランプリにあたる。その受賞はサプライズと共に受けとめられ、宮崎駿の存在は、日本だけでなく世界でも一気に知られるようになる。

この時期に『千と千尋の神隠し』が、ベルリン国際映画祭のコンペティションにあがったのは、幸運だけではない。宮崎駿の名前は90年代を通じて世界の映画ファンの中に静かに広がり、コンペティションに選ばれるための評価が築かれつつあったからだ。

『カリオストロの城』の英語版は『風の谷のナウシカ』ほどではないが、やはり改変を含むかたちで1992年に日本アニメを専門とするストリームライン・ピクチャーズからリリースされている。さらに同社は『となりのトトロ』もリリースしていたが、93年にフォックス

ビデオがあらためてビデオ発売したことが転換点になる。これが60万本の大ヒットになったのだ。宮崎駿の観客は米国でもアニメファンから一般層に移り始める。このヒットにディズニーが関心を示し、98年に『魔女の宅急便』をビデオ発売、99年にはディズニー系のミラマックスで『もののけ姫』が北米公開される。ディズニーのネットワークもあり、宮崎駿作品を観るひとは着実に増えていく。

映画祭では通常、数人の審査委員が合議で受賞作を選ぶ。審査委員の作品に対する熱意や想いが反映される。映画祭にはイノベーターが新しい才能をそこで見つけ、世界に引き上げるトレンドセッター的な役割もある。こうした理由が重なり、宮崎駿は世界で評価されるべきと、ベルリンで見つけられたのだ。

日本では米国アカデミー賞の長編アニメーション賞の受賞も、業績としてよく引き合いに出される。ただこの受賞もベルリンの影響が大きい。米国アカデミー賞は映画祭とは受賞作品決定のプロセスがかなり異なる。アワードは何千人ものアカデミー会員の投票で決まるため、幅広い知名度とブランドが必要となる。アカデミー会員でも必ずしも多くの映画を観るわけではないし、アニメーションとなればさらにその傾向が強い。

アカデミー賞では幸運もあった。当時の長編アニメーション部門は設立されたばかりで2

年目。アワードの評価の軸をどこに置くのかまだ定まっていなかったことが幸いした。この後アカデミー賞長編アニメーション部門はデイズニーやピクサーのCGアニメーションが受賞作品の主流となっていくからだ。作家性が再び色濃くなるのは2010年代の後半に入ってからだから、时期的にも貴重なタイミングであった。

サプライズな受賞で注目度が上がり作品が広く知られるようになったベルリン国際映画祭は、宮崎駿の世界での評価の起点となった。宮崎駿の活躍は、その後が続く日本のアニメ監督の世界進出でも大きな役割を果たした。映画祭から名を上げること、海外で認知を上げるルートが確立され、知名度のある監督が次々に登場する。そうしたルートを開拓した宮崎駿は日本のアニメ監督の海外評価を築いた先駆者でもある。

### 宮崎駿が評価されるのはなぜなのか？

宮崎駿のこれほど高い評価は、そもそもどこから生まれているのだろうか。作品の何が国境を超えて人々の心に響くのだろう。

ひとつは物語やテーマの複雑さにある。『千と千尋の神隠し』には善悪の明確な対立は設定されず、『もののけ姫』では正義の所在も結末も曖昧だ。デイズニーなどのハリウッド作品は「良き人間であれ」といった教訓的なテーマがストレートに打ちだされる傾向がある。しか

し、宮崎駿の長編アニメは芸術性と強いエンターテインメント性を兼ね備え、観客として成人も想定している。当時の欧米ではこれが驚きだった。新しいアニメーションの発見だ。

スタジオジブリが劇場映画にこだわってきたことも評価につながっている。海外では映画監督の評価は「まず劇場映画」という風潮はいまでも強い。映画祭が重要な場所になる理由だ。日本では珍しいテレビシリーズは手がけずに長編作品にほぼ特化するスタジオジブリの形態が、宮崎駿を映画監督として評価するなかで有利にもした。

さらに海外の監督、プロデューサーやスタジオとのつながりもある。長く続くジョン・ラセターや英国の老舗のコマ撮りアニメーション専門スタジオのアドマン・アニメーションズとの信頼関係。欧米のアニメーション界でイノベーターとされ深くリスペクトされる人々からの絶賛は、宮崎駿の人気と評価に大きな力を発揮した。

彼らの絶賛には、手描きによるアニメーション制作も大きな要素になっている。スタジオジブリの評価の高まりは、世界で手描きアニメーションが急激に姿を消していった時期と重なる。失われると思われた技術が、スタジオジブリでは咲き誇っていたのだ。

世界で高い評価を受ける宮崎駿とスタジオジブリだが、ジブリ自身は長い間世界を目指していなかった。海外各国でのビジネスパートナーも、利益よりは信頼関係が第一に選ばれて

いる。海外プロモーションもパートナー任せで、自らが作品を積極的に売り込むことはほとんどない。商品ライセンスやイベントなども、もっと大きな展開も可能だったはずだ。

『千と千尋の神隠し』も含めて3度あった米国アカデミー賞のノミネートで、宮崎駿が一度も授賞式に出席しないのはその象徴である。自分から出るのではなく、外から引っ張られ海外に広がっていく。2000年代初頭まであった他の多くの日本アニメに共通する特徴だ。

むしろ宮崎駿や高畑勲の情熱は世界の傑作アニメーションを日本に紹介することに向けられた。2001年に東京都三鷹市にオープンした三鷹の森ジブリ美術館では「ユウリー・ノルシュテイン展」「ピクサー展」「アードマン展」が企画されている。さらに三鷹の森ジブリ美術館ライブラリーでもフランスやロシア、北米の傑作を配給、上映してきた。一方で海外の作品、作家、スタジオを積極的に紹介する活動やグローバルな視点で、ジブリと海外のつながりを深め、世界に押し上げたこともまた確かだろう。

海外への積極的な展開は『風立ちぬ』以降、むしろいまのほうが大きい。2020年の北米でのHBO maxによるジブリ全長編作品の配信開始、Netflixでの世界配信、中国でのスタジオジブリ作品の全国公開もここ数年の出来事だ。米国アカデミー映画博物館の回顧展も、スタジオジブリの全面協力がなければ不可能な企画だ。背景には日本アニメを取り巻く環境

の変化もあるだろう。すでにアニメの視聴者の大半は海外にいる。アニメを作ることはそのまま海外発信に直結し、海外へのプロモーションも日本のそれと地続きである。

ビジネス面においても海外マーケットは海外ビジネスは外せなくなっている。宮崎駿監督の次回作『君たちはどう生きるか』はすでに制作スタートから5年以上が過ぎた。制作予算も膨らんでいるはずだ。いまや日本アニメの大作は海外市場も見通さなければなかなか回収できなくなってきた。それは宮崎駿ほどの監督でも無縁ではない。そうであれば海外への積極的なアプローチ、海外でのさらなる認知は必要だ。

そして2022年11月にはスタジオジブリのテーマパークといえる「ジブリパーク」が愛知県にオープンする。今年81歳を迎えた宮崎駿とその作品を国内でも海外でも将来にわたって持続させる、そんな意図も感じられる。アカデミー映画博物館の回顧展も、そうした一連の活動のひとつに見える。次作『君たちはどう生きるか』も含めて、宮崎駿が世界の映画史のなかでこれからさらにどのような位置づけられ、綴られていくのか。今後はそんな関心が国内外で続きそうだ。

# 宮崎駿 年表

1941年	東京都文京区にて生まれる
1963年	学習院大学政経学部卒業 東映動画株式会社(現・東映アニメーション株式会社)にアニメーターとして入社
1965年	『太陽の王子 ホルスの大冒険』制作に参加
1971年	東映動画を高畑勲、小田部羊一らと退社 アストリッド・リンドグレンの児童小説『長くつ下のピッピ』アニメ化を企画するが原作者許諾が得られず断念。原作者に会うためにスウェーデンに、初の海外渡航 『ルパン三世』(第1シリーズ)制作に参加
1978年	NHKのテレビアニメ『未来少年コナン』でシリーズ初監督(演出)
1979年	『ルパン三世 カリオストロの城』で長編映画初監督 『アニメージュ』副編集長であった鈴木敏夫と出会う
1981年	リチャード・コーベンのコミックス『ロルフ』アニメ化を企画するが原作者許諾が得られず断念 テレコム・アニメーションフィルム制作の日米合作映画『NEMO/ニモ』制作準備に参加、途中離脱
1982年	アニメ誌『アニメージュ』で漫画『風の谷のナウシカ』連載開始
1983年	イラストストーリー『シュナの旅』出版
1984年	『風の谷のナウシカ』(原作・脚本・監督)国内公開
1985年	株式会社スタジオジブリ設立
1986年	『天空の城ラピュタ』(原作・脚本・監督)国内公開 『風の谷のナウシカ』が『Warriors of the Wind』と編集されて米国公開
1988年	『となりのトトロ』(原作・脚本・監督)、高畑勲監督『火垂るの墓』と国内同時公開
1989年	『魔女の宅急便』(監督・脚本)国内公開
1992年	『紅の豚』(原作・脚本・監督)国内公開 『ルパン三世 カリオストロの城』米国でリリース 『となりのトトロ』米国でリリース、60万本の大ヒット
1994年	漫画『風の谷のナウシカ』完結
1997年	『もののけ姫』(原作・脚本・監督)国内公開
1998年	第28回アニメーションウィンザー・マッケイ賞(生涯功労賞)
1999年	『もののけ姫』北米公開、配給はディズニー系のミラマックス
2001年	『千と千尋の神隠し』(原作・脚本・監督)国内公開(興行収入が当時国内史上最高、現在までに316.8億円) 三鷹の森美術館開館、館主に就任
2002年	『千と千尋の神隠し』第52回ベルリン国際映画祭で金熊賞(グランプリ) 『千と千尋の神隠し』第30回アニメーション賞で最優秀長編賞、最優秀監督賞、最優秀脚本賞の3冠
2003年	『千と千尋の神隠し』第75回米国アカデミー賞で最優秀長編アニメーション映画賞
2004年	『ハウルの動く城』第61回ヴェネチア映画祭オフィシャルコンペティション オゼッラ賞 『ハウルの動く城』(監督・脚本)全国公開
2005年	第62回ヴェネチア映画祭 栄誉金獅子賞 国際交流基金賞受賞
2006年	『ハウルの動く城』第78回米国アカデミー賞で長編アニメーション部門ノミネート
2008年	『崖の上のポニョ』(原作・脚本・監督)全国公開
2012年	文化功労者授賞
2013年	『風立ちぬ』(原作・脚本・監督)全国公開 『風立ちぬ』制作終了後に長編アニメから引退発表(2017年に撤回)
2014年	『風立ちぬ』第86回米国アカデミー賞で長編アニメーション部門ノミネート 米国/映画芸術科学アカデミー名誉会員 米国アイズナー賞 コミックの殿堂に選出
2018年	『となりのトトロ』中国公開、宮崎駿作品では初 短編アニメ『毛虫のボロ』三鷹の森美術館で限定公開
2021年	米国/アカデミー映画博物館にて「宮崎駿展」開催
2022年	新作『君たちはどう生きるか』制作中

# 1 世界4大映画祭とは？

世界にはおそらく何千と数え切れないほどの映画祭がある。その頂点に立つのが世界4大映画祭である。4大映画祭が重要なのは、その歴史の深さ、格式の高さ、そこから派生するメディアからの注目度、世界の映画人が目指す場所だ。

通常はフランスのカンヌ国際映画祭、ドイツのベルリン国際映画祭、イタリアのヴェネチア国際映画祭を世界3大映画祭と言うことが多い。いずれもオフィシャルコンペティションを中心とすることが多い。いずれもオフィシャルコンペティションを中心に多くの作品が、映画界からの評価を競い合う。さらにカナダのトロント国際映画祭も加えて4大映画祭とすることもある。トロントは他の映画祭と違って、コンペティションを持たないため日本でニュースになることは少なく、ほかの3つに比べて知られていない。しかし北米興行・賞レースの前哨戦として圧倒的な影響力を持つ。その存在感はいまやカンヌ、ベルリン、ヴェネチアに匹敵するとされる。

これだけ注目が高いとなれば、世界中からトップクラスの

作品が山のようにエントリーする。コンペティション作品、上映作品に選ばれるだけで作品や監督への注目度はぐっと増すし、受賞となれば一目置かれるからだ。それだけに公式出品、さらにオフィシャルコンペに選ばれるには高いハードルを越える必要がある。

しかしアニメーションにとっては、実写作品以上に4大映画祭のハードルはさらに高い。世界の映画界では長い間、アニメーションは傍流とみられていた。メインコンペティションで初めて受賞したアニメーションが2002年のベルリン国際映画祭の『千と千尋の神隠し』であったのは、本文中で紹介した通りだ。だからアニメーションの活躍の場はアニメーション映画祭に偏りがちだ。いまでもアニメーションの長編作品が3大映画祭公式出品、上映されることは少なく、オフィシャルコンペに選ばれればちょっとしたニュースである。

一方で本来アニメーションは映画のジャンルのひとつではない。アニメーション監督の中には、「アニメーション映画」でなく、まず「映画」であると考えて欲しいと話す人も少なくない。

日本から3大映画祭で長編映画のオフィシャルコンペティションに選ばれたアニメ作品は、これまで『千と千尋の神隠し』（2002年ベルリン）のほか、押井守『イノセンス』（2004年カンヌ）、今敏『パプリカ』（2006年ヴェネチア）、宮崎駿『ハウルの動く城』（2004年ヴェネチア）『崖の上のポニョ』（2008年ヴェネチア）、押井守『スカイ・クロラ The Sky Crawlers』（2008年ヴェネチア）しかない。

またトロントでオフィシャルコンペティションに匹敵するのが、スペシャル・プレゼンテーション部門になる。これまでに日本のアニメーションで、ここで上映されたのは宮崎駿『風立ちぬ』、新海誠『天気の子』、湯浅政明『犬王』の3作品のみである。

## 4大映画祭で受賞・公式上映された日本の主な長編アニメ一覧

### 【カンヌ国際映画祭】

2003	茄子 アンダルシアの夏	高坂希太郎	監督週間
2004	イノセンス	押井守	オフィシャルコンペ
2014	かくや姫の物語	高畑勲	監督週間
2016	レッドタートル ある島の物語*	マイケル・デュド ク・ドゥ・ヴィット	ある視点部門
2018	未来のミライ	細田守	監督週間
2020	劇場版 アーヤと魔女	宮崎吾朗	
2021	竜とそばかすの姫	細田守	ブルミエール部門

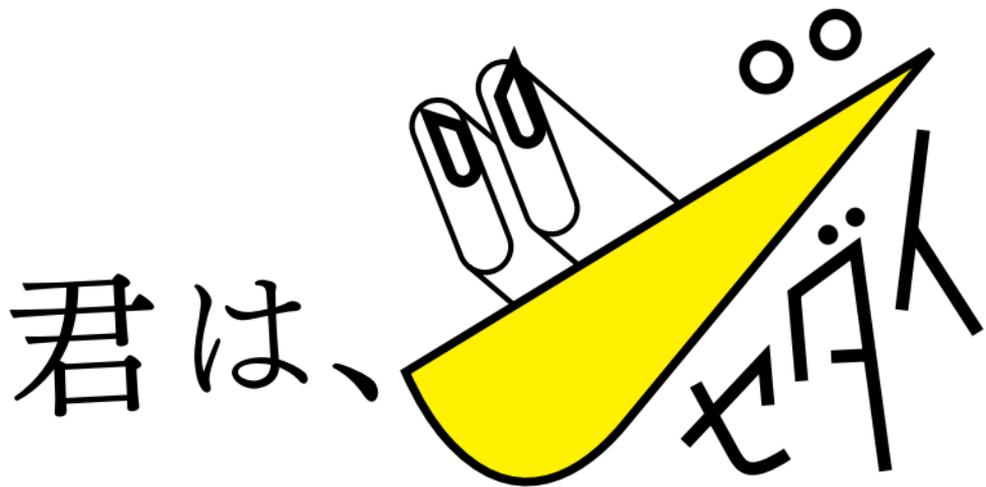
\*スタジオジブリの出資作品（フランス制作）

### 【ベルリン国際映画祭】

1998	PERFECT BLUE	今 敏	フォーラム部門
2000	人狼 JIN-ROH	沖浦啓之	パノラマ部門
2002	千と千尋の神隠し	宮崎駿	オフィシャルコンペ（金熊賞）
2010	宇宙ショーへようこそ	舛成孝二	Generation部門Kplus
2010	サマーウォーズ	細田守	Generation部門14plus
2017	GHOST IN THE SHELL / 攻殻機動隊	押井守	レトロスペクティブ部門
2022	バブル	荒木哲郎	Generation部門

### 【ヴェネチア国際映画祭】

2004	ハウルの動く城	宮崎駿	オフィシャルコンペ （技術貢献賞）
2004	スチームボーイ STEAMBOY	大友克洋	特別招待作品
2006	パブリカ	今 敏	オフィシャルコンペ
2006	ゲド戦記	宮崎吾朗	
2008	スカイ・クロラ The Sky Crawlers	押井守	オフィシャルコンペ
2008	崖の上のポニョ	宮崎駿	オフィシャルコンペ
2009	よなよなベンギン	りんたろう	特別招待作品
2013	風立ちぬ	宮崎駿	Venezia 70部門
2013	キャプテンハーロック	荒牧伸志	アウト・オブ・コンペ
2016	GANTZ:O	さとうけいいち 川村泰	アウト・オブ・コンペ



君は、

ジセダイ

何と闘うか？

<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

**メインコンテンツ**  
**ジセダイイベント**

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

**ジセダイ総研**

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

**星海社新書試し読み**

既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

**行動せよ!!!**